
騎兵戦線「夢から醒めた藍」

あと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎兵戦線「夢から醒めた藍」

【Nコード】

N5284T

【作者名】

あると

【あらすじ】

ひとときの夢から醒めた彼は、再び、藍染めの衣を纏った。

植物の蓼藍たてあいを醗酵はっこうさせて藍玉あいだまを作る。藍玉はすくもとも呼ばれる。藍の染料である。これに石灰と灰汁あくを加え、さらに醗酵させると藍液になる。布を浸して、乾かすことを十数度繰り返していけば、藍染めの完成だ。

葉俊はつしゅんは、藍色の衣を纏まとい、頭も同様に細い布を巻いていた。星明しめいかりの下では、夜に溶け込む装いであった。

彼は木々の間をすり抜け、邸宅の窓に寄った。南側に面した壁は、わずかに日中の温度を伝えていた。

室内から漏れる光は強い。宮灯きやうとうがいくつも置かれているからだ。宮灯とは、精緻な彫刻がされている照明具で、多くが女官の姿を模していた。壁際に狭い間隔で並べられており、闇を排除するのが目的であることも、調べがついていた。

邸宅の主は、夜に訪問する人間を怖れているのだ。闇に訪おもう使者は、凶事の主だ。命を絶ちに来る暗殺者から、光をもって遠ざけようと、照明を充実させていたのである。

呂贇りけんは、寝台の上で油の臭いに包まれていた。上掛けを被り、目だけをせわしなく光らせていた。

油が燃えることによって出る煤すすは、宮灯の内部を循環する際に除去され、部屋を汚すことはない。だが、動物性の油から出る臭いだけは、取り除くことができなかった。嫌な臭いが部屋の中に溢れても、彼は灯りを減らすつもりはなかった。

呂贇は、央の第二王子である。だが、王族としての威厳は欠けらも見えなくなっていた。子供のように脅え、災の揺らめきにも落ち着かない様子だ。侵略戦争の指揮官として、北方侵攻軍を担った人間とはとても思えなかった。

それもしかたがないことだ。彼は、失敗したのだ。

国家の事業が潰えたのは、彼が戦況を読めず、幕僚の言を入れなかったためである。それ故、敗將の責を問われることとなった。

表向きは、謹慎を言い渡されていた。戦に負けた王族として、屈辱を感じるのはわかる。だが、呂賛の怯えは、恥から来るものではなかった。

時期が悪かった。軍事的にも、政治的にも、領土拡大に乗り出していた時期だったのだ。国の内外への影響は大きく、したがって罪は重くなった。相応の罰が彼に用意されるはずだ。

歴史は語る。

先人の敗者は、謹慎中に事故死または病死していた。だから、呂賛は怖れるのだ。恐怖という側女そはめに囲われ、逃れられない運命の中にいても、救いの手を女官の宮灯に求めた。明るすぎる居室が、自らの居場所を外界に知らしめていることにも気づかない。藍染めの衣を纏った者が、容易に目標を定められたとも知らない。

葉俊は星の瞬きの下で、いくつかの気配を知覚していた。彼と同じ藍染めの影が、茂みの虫の音を瞬かせた。邸宅を守る護衛の命が静かに消えていく。任務が遂行されつつあることがわかった。

呂賛には、直接的な恨みなどなかった。戦には時というものがあり、勝算があっても、負ける可能性はどこかにある。敗戦を責める気もない。ただ、殺意を否定する気もなかった。

国が決断した処刑を請け負ったのは、彼の心の中のけじめだった。呂賛を逃がすために、傷を負った者がいた。癒えることのない傷を受けた。仲間と呼ぶことができる数少ない人間がだ。

女騎兵は撤退する軍の殿で、敵陣営に一人立ち向かった。そして、兵士の波に潰された。囚われ、傷を負いながらも、生きていることがわかり、葉俊たちは彼女を救出した。

だが、本当に救われたのか、わからなかった。時折、紫蘭は死んでいたほうが良かったのではないかと考える。生きることの辛さを、

終わらせてやるべきではなかったのかと。

葉俊の心は、今も苛^{さいな}まれている。生かしてしまったのは、本当は彼の欲だと気づいていた。紫蘭を失って苦しむのは、自分だ。もちろん、他の仲間も同じ思いかもしれないが、葉俊の感情は、彼らとは別のものだった。

撤退時、彼女のそばにいられたら、怪我をさせることもなかった。囚われることも、一騎で戦を挑むこともなかった。

だから、決めたのだ。彼女と共に駆けることを諦め、彼女を守る懐刀として生きることにした。

葉俊にとって、それは元の鞘に戻ることを意味した。暗部として生まれた彼は、元来、陰の存在である。紫蘭と出会ったことで、三騎兵の一人として表舞台に立つことを志したのだ。

振り返れば、短い夢だ。

ひとときの夢は終わった。陰の存在に戻り、彼女の影に潜むことになる。もう二度と、並んで立つことはない。

「誰だ！」

呂贇は物音に過敏に反応した。護衛を呼び寄せる。

「誰も来ませんよ」

葉俊はそつと窓辺から忍び寄った。

「ひっ」

音のしない気配に呂贇は言葉を失った。とうとう凶事が降りかかって来たことを理解した。灯りは役に立たなかった。

逃げたそうとして寝台から落ちた王子に、葉俊は憐れみも覚えなかった。

「誰か」

扉に這っていく呂贇の手が生温い血の海に浸った。扉の外から流れてきたものだ。廊下では、護衛たちが死んでいた。邸宅はすでに包囲されている。今夜ここで起きるこの証言者は、一人もいない。

「やめろ！」

錯乱した呂贇が葉俊に飛びかかった。王子の手が藍染めの布を引きちぎった。

葉俊が避けようと思えば、簡単にかわせた。だが、あえてそうしなかった。

「お、お前は、三騎兵……葉俊ではないか！」

その称号と名を知らぬ者はいない。国内にとどまらず、隣国にも、林立する周辺国家にも知れ渡っていた。国家に仕える者として、王族とは極めて近い存在だ。

「何故、お前が」

呂贇の青白い顔がさらに白くなった。思い出したのだ。指揮官である彼が敗戦で生き延びた理由と、犠牲にした者の名を。

「もう騎兵ではないのです」

絶望した男の首に短刀が突き立った。血飛沫が溢れ出し、葉俊の顔と衣を染めた。藍染めが黒く重く濡れた。

倒れた王子を一顧だにせず、邸宅を後にした。これでひとつの区切りがつけられた。そして、ここから新しい始まりだった。

葉俊の背後で、炎が上がった。暗部の同胞たちはらからの幕引きだろう。今回の仕事は国王自らの依頼だ。証拠を潰す必要もなかったのだが、彼らの流儀はそれを由としなかった。

藍染めの男が片膝をついていた。他の者たちはすでに街に消えている。

「戻りましたか」

葉俊は呟いた。

腹心の帰参を確認したものが、古巣への帰還を自らに告げたのか。短刀の血を拭い、懷に収めた。今や、それがただひとつの刃だった。馬を駆る時、背負っていた太刀は仲間に託していた。

「私は少し消えます」

頭領の言葉に、部下の頭が上下した。どこに行くのかという無粋な問いはない。

燃え広がり始めた炎が、葉俊の影を夢幻のごとく揺らしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5284t/>

騎兵戦線「夢から醒めた藍」

2011年10月8日01時52分発行